「韓のくに紀行」に見る司馬遼太郎の韓国認識

RYOTARO SHIBA's the recognition of KOREA on「KARANOKUNI - KIKO」

全　彰煥

【要　　約】

本稿は、司馬遼太郎が 40 年前書いた「韓のくに紀行」の中で韓国と韓国人に対する直接的表現だけをまとめて彼の対韓認識の特徴を分析するのに目的がある。紀行の旅程は古代日本と関係の深い朝鮮半島の南地域で、徹底的な準備下に行われた歴史踏査の旅であった。特に、朝鮮に帰化した沙也可の跡地訪問と彼の文集に対する調査は当時としては稀なことであった。司馬の観点は、古代日本と関わりのある加羅と任那、百済に集中し、歴史的な人的物的交流に基づいた百済文化との同質性を確かめているが、新羅に対しては否定的立場を持っている。朝鮮ノ役以来日韓合併に至る歴史的事件・戦争に対しては比較的に客観的視覚を保っている。韓国と韓国人については、半島国家の地理的特性を理解しながらも、儒教文化の弊害による文化と民族性の短所を厳しく指摘していて、この点においての韓国人の反論、反発は当然のことであろうが、個人的には概ね共感すると共に、韓国側の冷静な再考が要ると判断される。慕夏堂文集、平済塔、当時韓国農村等に関する感想と分析においては、資料中心ではない客観性不足と当時韓国の政治、経済に対する現実的状況認識の問題が提起できる余地があると考えられる。

Ⅰ．はじめに

「韓のくに紀行」は、週刊朝日の 1971 年 7 月 16 日号から 1972 年 2 月 4 日号に連載された。旅の時期は、1971 年 5 月 15 日から 5 月 18 日までの 4 日間で、コースは釜山 → 金海の入江 → 首露王陵 → 慶州・仏国寺 → 友鹿洞 → 大邱 → 洛東江 → 扶余である。

当時の韓国は、朴正熙軍事独裁政権下の政治の暗黒期であったが、経済的には貧困から脱出し始めるための初期開発途上国段階で活気ある明るい雰囲気であったと言える。日韓関係は、国交正常化して 6 年目に入っていたが、朝鮮半島の理念対立と在日（民団と朝総連）の対立で民間の交流は厳しい時期でもあった。

「韓のくに紀行」は 40 年前に書かれたのにもかかわらず、韓国と韓国人、また朝鮮半島を解るための案内書のような役割をしてきて、今も日本人に読まれている名著である。司馬遼太郎（以下、司馬と称する）の歴史観は、「合理主義への信頼」を基にしているという肯定的評価がある反面、観点の違う批判的意見もある。しかしながら、彼の歴史観は「司馬史観」1）と言われているほど知識人を中心に幅広くて圧倒的な大衆的人気を持っているのが言うまでもない事実である。司馬の名声と作品は韓国にもよく知られていて「韓のくに紀行」もそうであるが、関連の研究実績はあまり進んでいないのが実状である

本稿は、時代の隔たりを超えて、当時、司馬が

「韓のくに紀行」を通して韓国と韓国人に対してどのような認識を持っていたのか、また持つようになったのかを、直接的表現を中心にその特徴をまとめてみるのに目的がある。

Ⅱ．加羅の旅

1. 韓国へ

司馬の韓国への好奇心は 10 代終わりごろからだと自ら述べている。終戦寸前、戦車兵隊として帰途に接した疲弊な韓国のイメージは異様に複雑神秘的でありながら、確実な目的意識があったのがわかる。

○　韓国への想いのたけというのが深すぎて、ひとことでは言いにくかったのである。私は、日本人の祖先の国にゆくのだと、ということを言おうと思ったが、　－以下略－

また、日韓同祖論に基づく日韓合併の見解は明瞭で、また二重的観点を持っている。

大阪生まれの司馬は朝鮮と朝鮮人にたいして格別な思いやりをもっていて、日本と韓国は同じモンゴル系の言語をつかっている仲間意識をもっている。

○　そのころ私は朝鮮人の友人から「朝鮮はかならず独立する」という言葉をきいた。そのとき、べつにおどろかなかった。民族としては当然そうあるべきで、－中略－　私が朝鮮人なら死を賭しても独立運動をやると思い、そう思った自分にはげしい感動を覚えたことがある。

以下、韓国人の運命的短所である政治的傾向とそれに絡まっての非合理性、非生産性の指摘は残念ながら認めざるをえないし、在日コリアンの将来的な政治の役割についての真摯な心配は感無量である。

○　日本における六十万人の朝鮮人ほど老いた歴史をもった民族はそうざらになく、政治というものはどういうものであるかを民族の知恵としてそなわりすぎるほど備えているはずであるのに、その聡明さを、政治的論理という、この鋭利で、そして鋭利なほど一種の快感をよび、また快感をよべばよぶほど物事が不毛になるという危険な抽象能力が、覆ってしまっているのかもしれない。

司馬の紀行は、憧れの根本探しであって、その基には在日コリアンとの関わりがあったと考えられる。

2. 釜山の倭館

○　朝鮮は水がすくない上に、しばしば大きなひでりがあり、そういう年の冬には、「対岸へいこう」という連中が多かったであろう。日本列島は幸いにも初夏に梅雨があり、初秋に台風があって、耕作のための水に不自由しない。われわれ日本人の血に朝鮮半島通過の血液がまじるのは、日本の水がそれを呼び、この海域を吹く風がそれを運んできたものにちがいない。

上記で、朝鮮が昔から水不足であったということとそれが冬の日本列島への渡航の動機の一因となったという指摘は不可解なところがある。韓国が水不足の国とされているのは 20 世紀の産業化以後のことであり、むかしから、韓国人は韓半島（朝鮮半島）の豊かな自然環境を、自ら「錦繍江山」と呼んできている。が、もちろんのこと、資源と自然災害にも恵まれているとは言えないだろ

う。

日本神道の由来を韓半島（朝鮮半島）から探っている見解には、一見驚かされるところもあるが、大和時代以前の韓日の原始・古代史にまで遡らなければならないのを勘案した場合、無理なことではないだろう。

○　神道というものの原型が、朝鮮からきたか、表現を変えれば共通の時期があったと想像することは、想像という言葉が大げさなほどに自然なことである。

倭寇は韓半島有史以来常に厄介な存在であって、対馬はその中心であった。当然、ろくなことはしていない。つまり、対馬は日本を見渡す窓口であっただけに、韓半島の日本政策決定に重要な役割を果たしたのである。

○　その後、朝鮮が対馬と断交して倭館が一時閉鎖されたり、日韓関係にとっても対馬にとってももっとも不幸な事件である豊臣秀吉の朝鮮侵略があったりして倭館の歴史もいろいろ変転したが、徳川初期に再開され、幕末(厳密には明治初年)までつづいている。

3. 釜山にて

○　さらに朝鮮から貿易米で食っている者が七千人。計一万四千人。」要するに朝鮮からの貿易米で七千人が食っているのである。

○　何度もいうが、韓国にとってはこれはあくまで恩恵であって、得になることではなかった。

朝鮮時代、対馬人口の半分が朝鮮米で生き残っただけ、朝鮮人に対する認識が悪いわけはなかったはずである。対馬との血縁と古代からの交流等を含めて顧慮しても、朝鮮への目線はしょっちゅう暖かったのだろう。

しかし、近代化、帝国主義の時代の流れによって、韓日関係は勿論、対対馬関係も一変することとなり、その象徴的なものが、謂わば「明治維新成立挨拶文」である。

○　「わが国は皇祖連綿として太政を総攬して二千有余年になる。－中略－　これはわが皇上の意志である。」

韓国人というのは怒りっぽい民族だが、それにしてもこのあいさつ状を、こんにちの韓国人や日本人が読んで、どこをどう怒ったかは、想像もつかないにちがいない。

すなわち、朝鮮が自ら「王」と称して、「天皇」とか「天子」を使ってない　―　使えなかったと言うのがもっと説得力があるだろう　―　のは、司馬の指摘通りに間違いないと思う。

それは、朝鮮半島は大陸の影響を直接受けていて、いつも大陸の国々の政府の顔色をうかがわざるをえなったし、朝鮮時代に入っては儒教という媒体で精神・思想の面でも切っても切れない関係となってしまって、韓半島有史以来、朝鮮ほど中国の強い影響下に置かれた場合はなかったと言っても過言ではなかろう。

○　その証拠に、朝鮮というこの民族はかつては中国体制をとり、いまは近代技術を導入しつつも、服装だけは頑固に変えず、いまなお、この釜山市で一目瞭然であるように、若男女の多くが、その「俗」を守りつづけているのである。偉とすべきであろう。

野蛮人扱いしていた対馬中心の倭寇の案内で来た江戸幕府の代表を迎えた朝鮮の高官らは、もう

西洋文物を受け入れ一変しはじめた倭寇の様子に驚いていたはずである。日本は、大国との関係で守るべきルール知らずで、儒教的礼儀知らずだという根強い先入観に浸っていた朝鮮の官吏が倭寇代表団をどんな目つきで見ていたのかは、十分想像できる。

韓国人が喧嘩相手をののしるときに苛烈であるということは、半島人特異の短気、せっかちな性格に基づいたことで決して長持ちはしない。要するに、感情優先である。その点、強い相手を尊重して理性的に根強く興奮する日本の場合とは確かに違うと思われる。このような司馬の韓国人観は、韓国人との実質的交流関係と関わり等を基にしているのがよく解る。

4. 駕洛国の故地

○　海峡をへだてたとなりの国の民族がどういう言語であるかもしらずにすごしているのは、大海のなかの島嶼国家である日本の深刻な幸福のひとつであろう。

司馬は韓民族の血統や言語の特徴まで確かな根拠を持って見極めているのは、上記だけではなく本書のいくつかの所にも言及されているのからよく解る。

また、島国としての日本の特性を「深刻な幸福」と言っているのは、司馬の二重的心理描写であって、島国の「制限性」と「独自性」を両方評価したがっていた結果の産物であると考えられる。

○　しかしこれほどの文化大革命がいつごろであったかが、朝鮮史をいくら読んでもよくわからない。－中略―　おそらく政治的理由以外の　―　たとえば氏族の自然膨張といったふうな　―　社会的事情でそうなったのかもしれない。ともかくこの一事でもわかるように、上代朝鮮史というものはわかりにくい。

韓国人の中国式氏名表記についての司馬の見解は、固有の氏名が守れなかった古代韓半島人への遺憾やまたそれについて確かに残されてない古代朝鮮史に対するもったいなさまで感じられる所がある。司馬が指摘している通り、中国式氏名への転換は新羅の初期にまで遡れるというのは韓国でも定説であるが、絶え間ない大陸との交流、紛争にさらされていた韓半島の地理的、歴史的宿命の面では極自然な流れであったに違いない。

逆に言えば、江戸幕府末期、近代化の渦巻の中で平民まで自分の氏が許され急遽作られた日本人の氏名の裏話の事情は、韓国人としては可笑しくまた不思議な話として受け入れられている。これもまた根強い儒教的な観点からの判断であることは言うまでもない。その分、韓国人は中国式氏名表記を当たり前な事実として認識しているわけであり、謂わば「族譜」といった「家系譜」の枠の中で纏まっている自分の存在感について相当な自負心を持っていると言える。参考として、中国の氏名は 4 千、韓国は 1 千を超えないのに対して、日本は 20 万とか 30 万以上であると言う事実は、氏名についての認識の相違ぐらいの数値的隔たりではないだろうかと思われる所である。

因みに、司馬の指摘が、韓国固有の氏名を韓国人自ら保たれなかった勿体なさの気持ちとまたその歴史的変遷の資料の不足に対する府に落ちない不可解に基づいているように感じられるのは、あくまでも個人的感想に過ぎないのであるかどうかはよく解らない。

駕洛国に対する司馬の好奇心や愛情はまさに格別なものであって、「金海という地名は、日本人にとってアテネやローマといった地名以上の重要さをもって記憶しておくべき事項」であると言っているのは、これが 40 年も前のことであるのを勘

案しても驚くべきことである。

○　いずれにしても、いまの金海の地は、古代南朝鮮人もしくは古代日本人が「倭」という人種名でそこに土着し、好太王碑文によればかれらは「倭」という集団名で高句麗国の南下軍と奮戦してやぶれたという土地であることだけは、まぎれもないことである。

ただ、駕洛国に対して司馬は、日本で主張している「任那日本府説」を全面的に認めた上でのものであるかどうかについて直接的な意見表明を控えている。

5. 金海の入江

○　『日本書紀』が任那としてよんでいるこの駕洛国のあたりの住民が、何度もふれてきたように、倭人もしくはそれに似た民族の集団であり、日本列島に住む民族がかれらに対して人種的一体感をもっていたであろうということは否定できない。

任那日本府説の解釈をめぐる論議とは別に、駕洛国を中心とする半島人（朝鮮人と倭人）と北九州を中心とする日本人（日本人と渡来人）との深い関係で結ばれていると言っている。司馬が歴史家ではない観点から見れば、彼の中途的立場の記述はやむを得ないことであると判断される。

○　この隠れ海が駕洛国と日本をむすんでいたという歴史的なことはさておくとしても、風景としてもしこれがいまの日本にあれば観光屋や別荘造成屋がすてておかないほどのものだが、韓国人はこの大風景のなかでゆう然と小ざかなを釣っているだけなのである。

金海の入江を目の当たりにした司馬の感想に、案外、文学者の目線ではなく現実的面もあるのは斬新にも思われる。四方が水田の閑寂な農地に小魚釣り人だけ見当る眩しい光景の金海を見て、40年前の韓国の不動産事情はさて置き、日本だったら別荘地になったのだろうと思っていた司馬の考え方を斬新さ以外にどう受け入れるべきかちょっと戸惑われるようになるのが正直な気持ちである。

Ⅲ. 新羅の旅

1. 首露王陵

○　かれにはべつに仕事の目的ではなく、ともかく白鳳天平の造形世界がすきなかれは、その原型である朝鮮へともかくも行ってみたいのである。

上記は写真家である知り合いの井上博道が司馬の旅に同行しようとした理由であるが、これは司馬の旅の目的でもあったとみてよかろう。すでに、司馬は日本の大和、弥生は勿論白鳳天平文化の根本は韓半島であり、その主体は加羅と百済からの移民者であることを、頻りに言及している。

○　なんだか韓国のひとというのは激しさがあって、激しさにおかしみある。

「いい顔」で「激しさ」をもっている韓国人に対して、日本人は「険しい」けれど「優しい」と言いたかったかも知れない。

○　楼門をくぐると、突如天平のむかしに入りこんでしまったような思いがした。左右に建物があり、正面に拝殿がある。どうみても、天平建築であった。　―中略―　原型というのはす

べてこうであろう。しかしながらもし私が千五百年前の浦島太郎なら、この廟ひとつをみてもここは竜宮城だとおもったにちがいない。

文化の原型を見出す司馬の識見の極め付きは、もう自分が浦島太郎となって竜宮にきているような錯覚にまで至っている。かつて、小学校 3 年生から御蔵跡町の図書館出入りしながら自然に身につけられている歴史と文化財への識見は人並み離れたものであったに違いない。

2. 新羅国

○　日本の奈良朝以前の文化は、百済人と新羅人の力によるどころが大きい。さらに土地開拓という点でも、大和の飛鳥や、近江は百済人の力で開かれたといってよく、関東の開拓は新羅人の存在を無視しては語れない。

前述したとおり、奈良時代以前の日本文化は韓半島からの移民による所が至大であったと断言していながら、当時の韓国人は「略奪このみ」で「征服欲旺盛」な倭寇と同じく看做している。この点は、日本列島が九州から本州の北の方に開拓されていたことから見た場合　―　異説もあるが　―　、また、文化というのが水の流れのように高地から低地に流れ落ちる理屈から見た場合、韓半島から日本の方に流れ込んでいったのは当然な文化的摂理であると言えるだろう。

○　中国の農耕地帯にやってきては流血と掠奪をこのみ、征服欲が旺盛であったという古代の胡狄は、日本の中世末期のいわゆる倭寇から太平洋戦争までの「倭」とあまりかわりがない。

百済と新羅に対する個人的好みおいて、百済の文化をまるで血を分かち合った親戚にまで比喩している。

○　もし百済人がやってきて一夜の宿を乞うても大いに私は歓迎するが、もしそれが新羅人ならたとえ泊めても亭主としてどうも落ち着かない感じがしそうである。

引き続きの「任那」について、韓国側（北朝鮮の学者）の説に大筋で賛成している。この「大筋で賛成」の延長線に、南韓半島人と北九州人とは混血で混じって仲良くしていたはずだと司馬は主張している。「日本書紀」の任那日本府説という当時の状況では理不尽な面のある資料の観点と、先進の文化が韓半島から日本に流れ込んでいったはずだという文化摂理的観点との衝突においての「大筋で賛成」は、資料を大事にする司馬の作品性向から見れば腑に落ちない所がある。逆に言えば、司馬も「日本書紀」の任那日本府説は相当な無理があると見ていたのかも知れない。

○　―　金海と釜山の連中は純粋の韓人というより倭人の血がより多くまじっているといってよい。
　という言い伝えが朝鮮側にある。－中略－　要するに韓人といい倭人というけれども、それらは二千年もまえには混血してあるいは南朝鮮におり、あるいは北九州にいて、仲は悪くなかったにちがいないということをいいたいのである。

新羅文化に対するイメージはとにかく薄暗く、「愁いというか、人の心を搏つような粘液がにじみでていないような」ものにまで比喩している。

これは、彼の指摘通りに、中国南方の貴族文化の影響を受けている百済文化と、百済と北方の影響を共に受けている新羅文化の相違点の結果とも思われる。

3. 歌垣

韓半島の歴史以来、外部からの侵略が五百何十回あったと言って、その厳しい環境の中でもまともな国の体制を保ってきている韓半島の二つの国に対して褒め称えている。確かに、世界の地図を見てみても半島国家はほとんど見当たらない。生き残れただけで凄い民族だと褒められるのはどこか心さびしいと言うしかないのだが、それまた客観的に間違いない事実だからやむを得ない。

よく、自ら島国の特性を言っている日本とは違って、韓国人は半島人の特性についてそれほど言ってないのか、あまり意識もしていないような気がする。むしろ、半島に住んでいながらも大陸人のような錯覚を持っていると言っていいほどの様式を取っている所が多い。

○　（朝鮮民族には凄味がある）

と、ほとほと思ったのは、この仏国寺の松林で野遊びを見、歌垣の歌声をきき、そして杖鼓のリズムをきいたときであった。

たれがどういう方法で勘定したのかは知らないが、朝鮮民族が外敵の侵入をうけた回数は、有史以来五百数十回だそうである。

韓国の国花の木槿と野遊びの踊りに対する友好的反応もおもしろい。

○　この潅木の枝は繊維が多く、折ろうにも折ることができない。いかにも朝鮮民族二千年の歴史にふさわしい花だが、この民族の民族的生命のつよさは、この野遊びをみて、杖鼓の音をきいても、そのことがおそろしいばかりの感動で理解できる。

4. 慕夏堂へ

この旅の日程中、特に目につくのが「慕夏堂」訪問である。40年前のあの時まで韓国内では慕夏堂の存在はもちろん名前さえ、ほとんど知られてなかったのが実情であって、司馬の本書によって話題になったそうだ。

朝鮮上陸早々に連れの兵卒とともに集団投降してしまった侍について関心をもったのは当然のことであって、司馬はその原因と切っ掛けを追窮している。

○　われ中夏（中華）の文明を慕うこと久し」として、動機は文明へのあこがれから日本を去り、朝鮮に従軍したのである。

集団投降のスローガンである「われ中夏（中華）の文明を慕うこと久し」に関する理不尽な所の説明は儒教と儒学から始まっている。

5. 倭ということ

朝鮮は中国の儒学を受け入れてそれを「儒教」に昇華し政治理念としたのだが、司馬はそれを「倭」の純粋性・自然さと対比している。

○　このことは日本人にはわかりにくいが、キリスト教という絶対的な原理でもって、本来自然物にすぎないと規定された人間を、国家的に飼い馴らしてきた歴史をもつ西洋人ならばよく理解できるのにちがいない。

朝鮮王朝を立ち上げた李成桂（イ　スンゲ）は、仏教を根幹とする武人貴族中心の高麗の将軍であった。腐り果てた高麗上層部の問題を知り尽くしていた李成桂は、貴族門閥を廃止して庶民中心の国家を目指す中で、仏教代わりの政治的理念として儒学を積極的に奨励したのである。朝鮮初期は彼の理想が不安ながら定着に成功していたと評価されている。

○　つまり中国的原理　―　礼教　―をもって国家・社会・家庭体制の原理としてきた、という意味であり、中国をもって儒教的宗主国としてきた。　―中略―　宗主国である中国への礼を紊す　―　たとえば侵略　―　などということは朝鮮はしない。朝鮮もまた、儒教原理をもって中国を本家として立てているかぎり、「中国が攻めてくうることはない」という安心感があった。防衛のむずかしい半島国家としてはこれが最良の生き方であったろう。そして礼教という絶対原理（とくに李朝）で国内を馴化しておくと内乱のおきる可能性がすくなく、これほどいいことはなかった。

中国だけを気にしていたヒマワリの朝鮮政府であったのは事実で、儒教という根強い共通の精神文化で結ばれていたから、中国に朝貢する主従関係と看做されても仕方がないが、司馬も言っているとおり「東方礼儀ノ国」と言われはじめたのはもう時代を遡って何百年も前のことである。

因みに、紀元前 1100 年前、中国の王族出身の箕子が古朝鮮の王になったという箕子朝鮮説があるのだが、この箕子が学識の高い人物だからかれの治める国は礼と義の国であろうと言っているのが、中国の古文書に残っているそうだ。つまり、朝鮮が儒教国家となったのは突然の結果ではないと見るべきである。

○　以上によって、朝鮮人にとって「文明」という問題は国家の存亡を賭けるべきものと考えられてきたことがわかるであろう。つまりはクルリと裸になるというような非礼教的行為が、朝鮮人にとってはありうることではなく、さらにはそういう他人をもゆるせず、むろん平気でハダカになるような人種を警戒し、ときに戦慄する。

儒教文化の朝鮮と武士文化の江戸（日本）は、その前まで外見的には武人貴族中心の社会であった。朝鮮は、独自の儒教中心の精神文化を残したにも拘らず、結果的に惨憺な末路を迎えてしまったから、政治理念として文明の役割まで批判されがちで、司馬も同じ目線で見ているわけである。

個人的にも朝鮮は豊臣秀吉による「朝鮮ノ役」以後、もう滅ぼされるべきであったと思っている。目指していた「庶民中心の国家」は跡型もなく民意は踏み潰され国全体が非現実的、非実用的概念の束縛に縛られ喘いでいたのである。それで近代化の波に乗れなっかたから、確かに、朝鮮は儒教文化のせいで滅亡したと言えるだろう。

でも、文化の影響はそこで終わってしまう物ではない。その悪影響からの理念の名分下で、朝鮮はまた二つの国に分断されてしまったのである。もし戦後の朝鮮が共産主義と資本主義といった理念で分かれていなかったら、歴史の流れとしては、日本列島が分断されたのかも知れない。

北朝鮮はさて置き、韓国は儒教に資本主義を切継ぎして時代遅れの近・現代化の道を歩んで来ているが、注目すべきなのは、その過程の中で、血を流して民意本位の民主化を勝ち取ったということである。これは東アジアでは最初のことで、これからの歴史の実験場でどのような形で変質・発展していくのかは、これまた歴史であろう。

6. 沙也可の降伏

○　「われ、中華を慕うこと久し」

というのが、『慕夏堂記』の筆者が説明する降伏の理由なのである。しかし本当なのかどうか。いったい当時の日本武士が「中華の風」という文明を慕うほどに儒教的教養に富んでいたのかどうか。

『慕夏堂記』に記されている沙也可の投降の理由について司馬は腑に落ちないと疑問を提起している。要するに、日本の武士であった沙也可が「われ、中華を慕うこと久し」と明言したはずがないだろうというのが彼の話であって、当時の書籍の特徴でもある一種の文飾の可能性を指摘している。

対比的な例として「藤原惺窩」を採り上げている。

○　倭の“野蛮”というのはあくまでも凛々しさということであり、武士たちはそれをもって人間の行動を律した。

沙也可は、武士である。

惺窩のように公卿の血統でしかも僧侶あがりという教養社会つまりは凛々しさを必要としない特殊社会の出身ではなく、沙也可は日本にあっては掃いてすてるほどにごく普通の社会的存在である武士なのである。

藤原惺窩は公卿出身の僧侶で倭の社会を嫌悪した異常人として見ている半面、沙也可は武士であったので武士の特徴でもある「凛々しさ」から考えた場合、彼の投降降伏はスローガンのように思想的動機ではなかったと言いている。

しかし、沙也可が三千の兵卒を率いて開戦上陸してすぐに投降したのは意味深く示唆の所が大きいと思われる。それに、長い間用意していたかのように「われ、中華を慕うこと久し」と吐きだしたのはつじつまが合っていると見るのにもっと蓋然性があるだろう。

文飾の指摘は、文献学的可能性を認めるとしても直系子孫の直筆であった点と朝鮮中期の家門の歴史みたいな先代に関する書物に恣意的改竄行為は、韓国人としては逆に腑に落ちない所である。

7. 金忠善

司馬は、沙也可は朝鮮名の金忠善であると断定しながら、当時日本の武士の中で儒教的性向の濃厚だった対馬武士出身であろうと見ている。

○　「日本は強いもの勝ち」

と、中世末期・近世初頭の藤原惺窩はこの実情に絶望した。なにが社会のために正義かという観念は　―　せめて観念だけでも　―　日本社会に存在せず、従って力に負けた弱い勢力への同情を「正義」の基準でやるわけにはいかない。

武士の凛々しさの裏には単純で冷酷な厳しさがあるということについて、韓国人は植民地時代も今も知らないままである。倭を知るためには武士の凛々しさは不可欠だと言っている司馬の話は、よほど日本の精神文化について理解している外国人ではないと、納得できないだろう。

沙也可の投降も典型的武士の特徴からは考えられないことであるという司馬の指摘と、「日韓合併後に日本人の庶民が朝鮮の庶民に対してとったあのいわれない態度」について、武士文化に無知な韓国人は違和感と驚きを感じるに違いない。

8. 友鹿の村

1970 年代の韓国農村風景について次のように述べている。

○　韓国の農村を貧困といえるだろうか。

その社会を測るために、貧富というあいまいな基準が二十世紀のある時期まで大いに用いられたが、いまは農村が荒れているか荒れていないかというほうがより重要な基準であるように思われる。その基準からいえば、日本の農村のほうがはるかに荒れている。

中塚明は、「韓のくに紀行」は韓国の農村地域だけを見て触れているとその弱点を批判しているが、

その観点は旅の目的があくまでも一種の歴史的テーマ観光であったのでいいとしても、農村の現実に対する判断基準が紀行文に相応しい限界を持っていると思われる。

要するに、当時の韓国は軍事独裁政権下で地域的に異常な不均衡であった。結構な経済的差のある豊かな国の人が貧国の農村を旅して詠んでいるロマンチックなセリフの匂いがすると言ったら言い過ぎかも知れないが、非現実であるのは確かである。

9. 沙也可の実在

○　朝鮮人というのは元来沈黙の時間の多い民族で、表情もやたらと崩したりするようなことはない。子供までが、そうであった。

上記の言及は、感情的で短気の韓国人の性格とは違っている。文中において、そんなに大事な所ではなく、ただ思いつきの感想と見た方がいいかと思われる。

韓国人、特に南地域の人は、絶対優秀なスパイになれないと日本人より言われて、本人も肯いてしまったことがある。私も自ら、韓国人って自分の感情が隠せない者だと日頃から思っているから。

「慕夏堂」訪問は当時としては珍しいことで、「韓のくに紀行」の目立つ特徴でもある。加藤清正の右先鋒将であった沙也可の集団投降降伏について、①「慕夏堂文集」の文飾の可能性を提起、その理由として、当時の文集編纂傾向による意図的行為の可能性と、「倭」の凛々しさの象徴的存在の最上級武士が「中華の文明を慕う」という精神文化的理由をもって降伏するはずがないというと主張している。しかし、この二つの指摘は、客観的根拠によるものではなく、蓋然性も薄弱い点があると思われる。勿論、韓国側の一般論とも離れているのが実状である。因みに、客観的資料を大事にする司馬の間違いの例も少なくない。2)

Ⅳ. 百済の旅

1. 大邱のマッサージ師

旅には欠かせない挿話の紹介で、前近代的韓国事情を赤裸々に告発している。

○　朝鮮人は一般に慇懃ではない。国風の特徴であり、それ自体は決してわるくはなく、たとえばその傾向が国際会議場などでみる場合、日本人のぺこぺこ傾向よりもはるかに凛然としていてうらやましくなる。それはいい。私は元来、年少のころから朝鮮人と数多くつきあってきて、朝鮮人のよさをナマの朝鮮人以上にわかっているつもりであるが、しかしこの場合は凛然という表現はあたるまい。

時代は変わっているが、この時期の在日同胞（韓国人、朝鮮人）はお金持ちと認識され、また、日本人観光客はいいカモであったと何気なく覚えられている。高校生まで、在日の親戚のいる知り合いが羨ましく思われたほどであった。

今も周りには在日と日本人の内縁の妻が数多くあって、友達や教え子の中にはそのお子さんも何人かいる。昔は日本人男性と韓国人女性の国際結婚が主流だったが、いまは韓国人男性と日本人女性の国際結婚が増えてきていて、それの示唆する所は多いと思われる。今の韓国人が途上国の外国でいいカモとなって同類の社会的問題を起こしているのは同じ脈絡で見て無理はないと思う。文化もそうであるが、お金も上から下に流れる物である。

ただひとつ違うのは、韓国人は「憎悪の対象」―　司馬の見ている「憎悪の対象」としての日本

人は、歴史的側面で教育された韓国人の立場を前提とする　―　とは言われてないことである。

2. 賄賂について

○　こういう道徳主義こそ儒教的体制というものであり、日本人が考えているような朱子学、陽明学というような書物だけの甘っちょろいものではないのである。

ホテルフロント係にマッサージ師の紹介料をぼったくられたという思いは、前近代的韓国社会の問題点　―　腐敗と賄賂と代表される　―　にまで至っている。また、韓国の前近代性は同じ精神文化の中国の前近代性に、またアジアの前近代性まで広まっている。つまり、時代を先駆けた「脱アジア」と儒教的束縛に縛られなかったから、今日の先進国の日本ができたということになる。

近・現代産業化過程においての韓国と中国の時代遅れの前近代性の原因を儒教文化から見出すのは当然のことであるが、周知のとおり儒教文化圏の国は地球村において東アジアに限られている。近現代化の負け組の特質をその国の文化的力量、背景等から分析する場合、多様なデータが出てくるだろう。

日本の「脱アジア論」3）は先見の明があって可能な成功的事例である。国民全体が望んだあげくのことではなく、最初限の政治的分離・軋轢だけで国全体が近代化の波に載せられた素晴らしい転換であったといってよいだろう。

3. 洛東江のほとり

○　私がもし朝鮮にうまれれば外国人という外国人に対していっさい信を置けない気持をもつに相違なく、同時にこういう外因が内因をつくりだしてゆくという法則を適用すれば同国人をも、かれらが敵味方のいずれかに通じているかもしれないということで、つねに油断なく他の挙動を見張っておくという猜疑心を智恵としてもつにいたるにちがいない。

秀吉の朝鮮ノ役の不当性は他の所でも挙げている。前述のとおり、有史以来五百数十回の外来侵略を受けている韓半島の歴史に対して「つねに油断なく他の挙動を見張っておくという猜疑心を智恵」を戒めとして伝えているような気がする。

4. 倭の順なること

○　日本人は三人集まって一つの目的、例えば馴れない町へきて、どこか旨い酒を出す店を探そうという場合、一度でもその町にきたことのある者を首領にしてあとの二人はだまってついてゆく、という風がある。多少案内者のかんを疑わしく思っても、ともかくも他の二人は無用の故障を言いださない。

朝鮮人はそうではない。

上記は、今はよく言われている日本人の特性の一つである。日本人は共産主義を凌駕する集団主義乃至全体主義の特性をいつの間にか身につけられるようになったという話を聞いたことがある。それは島国と特性や武士社会の遺産といった色んな要因から生じた絶妙な調和といっていいだろう。

韓国人の場合、これもまた今はよく言われているように、個人の個性が強くてひと固まりに成りかねる特性をもっている。世界化の中でも国家主義は日々色濃く重視されているし、国家も集団なんだから組織的一貫性は危機の前ではもっとその価値を発するに異議はない。韓国の場合、現代化の過程で経験したばかりの自由民主化運動の貴重な共同価値を持っていることを忘れてはならないだろう。

5. 李夕浩先生

○　おそらく加羅とか加洛とかいわれた金海あたりに住んでいた人に相違なく、そうとすればのちの任那国の版図であり、古代日本の属領？　といわれてきたこの任那国は新羅に併呑されてその王族も新羅の貴族になった。

司馬の祖先は、家系伝説で佐々木源氏に一族の可能性があり、それが遠回りして新羅の王族と関係あるだろうという在日学者金達寿氏の憶測の話であるが、司馬がこの話を載せているのは、この憶測に対して気持ち悪いと思わなかったかも知れない。

ただ、司馬の好みと趣は新羅より百済にもっと親近感をもっていたらしく、それは自分の血統においてではなく日本文化の源泉の流れの面であったような気がする。

○　新羅なんぞは唐の力を借りて百済をほろぼしたんだ。それだけのことだ。新羅文化のとこに独創性がある。みな百済がお手本じゃないか。

百済の末裔は韓国の全羅道地域の人達であり、今も「地域感情」という社会用語もあるぐらい、旧新羅の子孫である慶尚道の人達と微妙に競争関係にある。

歴史の中で、負け組の文句はよくも被害意識されがちなもので、韓日関係にもそれは存在する。新羅文化に独創性がないかあるかはわからないが、李夕浩氏は新羅が外勢の唐の力を借りたことを歴史の汚点である見ているように思われる。

しかし、その歴史は今も繰り返されているし、半島国家の韓国の避けられない定めかも知れない。

6. 百済仏

司馬は韓半島の民族構成について、半島の韓族・モンゴルの扶余族・大陸の漢族と一貫して三分化している。更に、百済は韓族で文化は中国南朝系であることに注目し、それが飛鳥文化にまで繋がったと述べている。

○　百済は北朝にたよらず、もっぱら揚子江以南の南朝にたより、その文化的影響を濃厚にうけた。

その百済の影響を飛鳥期の日本がうけるため―　つまりは江南の六朝の文化がはるか極東の島へ飛び渡って　―　飛鳥文化の華をひらくというふしぎな作用をもたらすのである。

百済が、南朝（六朝）の文化を模倣したことが、この国の性格と運命を決定したといえるであろう。

百済仏の微笑と日本の大和の中宮寺や太秦の広隆寺の弥勒菩薩の微笑は同系であるのを確認しながら、百済の惨憺な末路にもかかわらず、彼らは幸せであっただろうと悲しい気持ちを慰めている。

○　たしかに百済仏は、淫楽というものを透明にしきってなにごとかへ昇華させたような魅力がある。さらに扶余にのこっている百済仏の特徴はことごとく口もとにかすかな微笑をたたえていることであり、大和の中宮寺や太秦の広隆寺の弥勒菩薩の微笑に共通していた。

反面、新羅は唐の力を借りた野蛮国と断言している。百済は可哀そうにも孤独であったに違いない、それで血を分かち合っている日本に頼るしかなかったという同盟の連帯感を述べている。

7. まぼろしの都

○　新羅から唐の長安へ使いを出すとき、使者が韓民族固有の名前を名乗っていると唐が

親しみを持たないだろうというので、こんにち朝鮮人がことごとく中国風の姓名を名乗っているように、中国風の姓名に変えた。民族的な名前をすてて支配階級がことごとく外国の名前になってしまうなどというのは、あざやかすぎるほどの小国外交である。

連合軍の新羅と唐の関係は平等ではなかったという指摘は、韓国の歴史でも認めている。ただ、統一後、唐の一方的路線に反発し、統一新羅は対唐政策を転換する。結局、唐の勢力を退いてしまうのだが、ここまでの言及は本書にはない。

○　しかし朝鮮人はいつの時代からそうなったのか、現実よりむしろ観念で激しく昂奮するのである。

郷土史学者の李夕湖氏の熱烈な反新羅感情や毒説をもって、驚くべきにも、日本人の原型云々している。これは根拠をもってのことではない。本書で一貫している、百済系古代韓半島人と古代日本人との同質性ではないかと思われる。

司馬の冷静な視線は取り消された「扶余神宮」建立計画に対する李夕湖氏の多血的反応をよくも見抜いている。

8. 日本の登場

○　日本史上、国家の規模においておこなう最初の外征でありもしこの大事業に失敗すれば日本は滅亡するかもしれないという危機感が天智天皇にあったということは、この天皇の性格からして察せられる。この天皇の一代は、国際情勢をもろに感じたためのノイローゼのような気味があった。

司馬が一貫して指摘している百済と日本との関係ではなくても、日本の対外派兵は歴史の結果として起こった。それが可能であった理由として、まず「人口が多かった」のと「渡海のために水軍が必要であって、北九州には、すでに安曇氏の兵船がたくさんあった」のを挙げている。このような物理的な理由でなくても、司馬の本書の論理によると、日本の派兵は必然的なことであったと言っていいだろう。崖っぷちの危機に迫られている百済の可哀そうな兄弟・親族を見捨てることは出来なかったはずである。

因みに、百済の滅亡と大化改新と何らかの繋がりが有りうるといったら、根拠のない過言になるかも知れないが、その蓋然性は幾分想定できるだろう。

9. 白村江の海戦

○　日本人が個々の意識のなかで誕生するのは、このときが最初であったにちがいない。

「日本の下層者の意識のなかに天皇が誕生するのも、このときからであったであろう。

上記のことがもし一般論と見ていいのなら、以前の日本古代史　―　例えば、「卑弥呼」とか　―の解釈にも影響されるのではないだろうか。

○　このあと、百済からの亡命者がつづき、戦後三年目には一時に二千余人がきた。さらに白鳳期といわれる芸術時代が花をひらくのも、亡命百済人たちが日本の宮廷に収容されたことをはずしては考えられない。

司馬は韓国人の弱点、欠陥に精通している。それが 40 年も前のことであるのを勘案すると、恐ろしい感嘆を感じざるを得ない。

10. 平済塔

韓国独特の「温突」はツングース系満州から伝

わったもので中国の漢の文化ではないといいながら、満州を漢民族と個別化している。最近、中国は「東北工程」といって旧満州地域の歴史を漢族の歴史に編入させようとしていて、韓国側が反発している状況から見た場合、司馬の観点は 40 年も前の日本知識人の客観的歴史解釈になるに違いない。

○　ともかくも朝鮮の温突は、満州が単に中国の一地方になり、さらにはツングースの諸国家が歴史のはるかかなたで掻き消えてしまったこんにち、その名残りとしてこの扶余の夜を温かくしてくれていると思えば、ただごとでないようにおもえてくる。

百済塔（平済塔）に対する司馬の見解は、塔の文化遺産的価値判断ではなく、塔が建てられた名分に偏ってしまって、学術的事実を見逃している。

○　その後の朝鮮史における中国の重味と中国への遠慮を物語る機微といえるかもしれない。朝鮮という、この地理条件のなかで国を保つということは、この塔ひとつをみてもわかるように、それ自体がつねに苛烈で悲痛なのである。

現在は「定林寺地五層石塔」と呼ばれている「平済塔」は、羅・唐連合軍の勝利の後で建てられたものではなく、以前からあったもので、五重塔の基壇部に「大唐平百済国碑」と刻まれたのも戦争の後のことであるのが明らかになっている。4）

また、この塔は百済の石塔として残された二つの内の一つであって、以後の韓半島の石塔の定型とも言われる貴重な文化遺産である。韓半島の中で、旧百済である全羅道は芸術と文化の地域としても名高い。その子孫が文化遺産として保存してきた愛情は、「平済塔」と誤解された名分より崇高なものであったと言ってよかろう。

11. 近江の鬼室集斯

紀行文は、滅亡した百済の復興運動の中心人物であった王族の鬼室福信の子孫の記録でまとめてある。

○　要するに鬼室集斯ら百済の亡命者がこの蒲生郡一帯に住んだときにはすでにこのあたりには出雲系の鴨族がいて古神道を奉じ、弥生式農業を営んでいたにちがいないが、『日本書紀』の記述のにおいから察しても広漠たる原野というに幾く、人煙もまれであったようにおもわれる。

日本の支援による数回の百済復興運動は失敗で終わってしまう。その詳しい内容は韓国の歴史教科書に載ってあって、鬼室福信の名も活躍も紹介されている。また、再建復興に失敗した指導部の一部が日本に亡命したという事実まではよく知られているが、鬼室集斯については紹介されてないのが実状である。

百済と日本の過去の歴史と同盟関係から見れば政治的亡命は十分考えられることではあって、亡命以後の事情等に関する研究・把握が、韓国側から殆ど行われていないのは残念なことである。逆に、司馬が確かな資料を持って百済の亡命子孫の跡型について述べているのは、本書の最初目的でもある歴史の根本探しといった面では、終始一貫していると言えるだろう。

Ⅴ．おわりに

以上の分析を通じて、司馬の韓国と韓国人に対する認識は、半島国家の地理的環境と政治理念としての儒教文化の短所を基にしているのが分かっ

た。つまり、① 朝鮮半島文化は半島国文化の地理的特性をもっていること、② 中国から受け入れた儒学が儒教思想の政治理念化される過程で、大陸中心の全近代化していること、③ 民族性は個人中心の政治性がつよく、論議好きな短気性であることを一貫して述べている。

日韓関係においては、豊臣秀吉の「朝鮮ノ役」は名分のない侵略戦争と規定しているが、「任那国」は日本書紀の資料による日本側の立場を主にしながらも現実性不足という韓国側の反論の可能性を無視していない。また「日韓合併」について歴史的事件・結果は多様な面で見るべきだと言及を控えている。

百済と新羅については、新羅は政治的には外勢に頼り、文化的にも決定的特徴に薄いと見ている半面、百済にたいしては文化的同質感はもちろん、政治的にも共に大陸勢力に脅かされていたという共感認識をもっていた。このような司馬の認識は、古代南朝鮮半島人と対馬および北九州人との繋がりと交流を積極的に解釈した結果で、「白村江」海戦や渡来人という歴史的結果の根拠として認識している。

一方、司馬歴史観の特徴と言われている資料中心の合理性の面では、いくつか矛盾があり、紀行文の限界も見られる。まず、「慕夏堂文集」の文飾可能性の意見は、文集が 16 世紀に祖先対する実証的記録であったことと、上級武士が精神的価値観の葛藤で思想的に転向するはずがないという主観性に偏っていることを勘案した場合、客観性の足りないところがあると考えられる。次の「平済塔」に対する司馬の意見も ― 「平済塔」建立時期について明らかになった新たな事実は別件として ― 塔に刻まれている「百済ヲ平グ」という文句自体に拘りすぎてしまったような気がする。また、韓国の農村地域に対する感想は、政治・経済的状況が反映されてないため、非現実的紀行文となってしまった限界を表わしたと言えるだろう。

司馬の韓国関連書の代表作である「韓のくに紀行」が韓国であまり知られていないのは、韓国人に対する厳しい評価と韓国文化を儒教文化の弊害的悪影響の面で判断しているからであると思われる。しかし、儒教の弊害による朝鮮の末路と韓国人の短所の指摘について、残念ながら個人的には同感せざるを得ない。朝鮮半島は今も列強国に囲まれて理念の分断国のまま緊迫していて、何十年、何百年前の歴史と同じ歯車の中にある。ただ、韓国は儒教の旧習を背負い資本主義産業化に成功して、政治的民主化を血を流して勝ち取ったという貴重な財産をもっているからこそ、40 年も前の司馬の客観的指摘に耳を傾けなければならないと思うわけである。

註

1） 歴史小説家の司馬遼太郎の一連の作品に現れている歴史観を表した言葉である。端的に言えば「合理主義を重んじる」ということが前提としており、それは大戦期に戦車将校として軍の中にある様々な非合理を見たことから来ているとされる。具体的には「明治と昭和」を対置し、「封建制国家を一夜にして合理的な近代国家に作り替えた明治維新」を高く評価する一方で、昭和期の敗戦までの日本を暗黒時代として否定している。「司馬史観」という用語は司馬自身ではなく、後からつけられた。

2） 司馬は朝鮮の疲弊さに触れて「李朝五百年は世界に例のない貨幣ゼロの国」と言ったことに対して、旗田巍は、「貨幣の鋳造はすでに高麗時代に始まっています。李氏朝鮮時代になって初期には貨幣や鉄銭などの流通が試みられましたがまだ一部にとどまっていました。それが生産力の発展にともない、1678 年以後には国家が鋳造する小額貨幣である「常平通宝」が常時鋳造され、ひろく流通していました。」と反論し、また司馬の儒教疲弊論にたいしても異論を提起している。
― 中塚明、高文研、2009 年、『司馬遼太郎の歴史観』、pp. 49～50

３）　福沢諭吉が「脱亜論」を書いたのは、1885 年（明治 18 年）のことであった。彼は日本が近代化するためにはアジアの「悪友」から離れて、「西洋の文明国と進退を共に」する以外にないと述べた。だが、この頃の日本政府内には朝鮮を清国から独立させ、恒久的に中立化する方がむしろアジアの安定に寄与するという外交構想を持つものもいた。意外と思われるかも知れないが、そのような意見は井上毅の「朝鮮政略意見案」（1882 年）であり、山県有明の「外交政略論」（1890 年）であった。
― 中村政則、岩波書店、2009 年、『「坂の上の雲」と司馬史観』、p.175

４）　益山の弥勒寺祉石塔(国宝第 11 号)と共にただ二つ残っている百済時代の石塔で、韓国石塔の始祖と言われている。塔各部の特異な様式は、韓国石塔様式の系譜を定めるのに欠かせない塔である。弥勒寺地石塔から始まった百済石塔の形式を受け継いだこの石塔以後の百済石塔の形式は、多少の細部変化はあるものの高麗時代まで続く。初層塔身の 4 面に、唐の蘇定方が百済を滅ぼしてから自分の紀功文を刻ませたが、石塔は記録のずっと前に建てられたのが明らかになっている。
― 李道学、1997 年、「定林寺址五層塔碑銘とその作成背景」、『先史と古代』 8、韓国古代学会

参考文献

1. 松本健一、2009 年、 新潮文庫、『司馬遼太郎を読む』
2. 中塚明、2009 年、高文研、『司馬遼太郎の歴史観』
3. 中村政則、2009 年、岩波書店、『「坂の上の雲」と司馬史観』
4. 司馬遼太郎、2008 年、朝日新聞出版、街道をゆく 2『韓のくに紀行』
5. 志村有弘編、2007 年勉誠出版、『司馬遼太郎事典』
6. 平凡社、2007 年、『別冊太陽　司馬遼太郎　新しい日本の発見』
7. 潮匡人、2007 年、PHP 新書、『司馬史観と太平洋戦争』
8. 和田宏、2004 年、文春新書、『司馬遼太郎という人』
9. 青木彰、2004 年、朝日選書、『司馬遼太郎と三つの戦争　戊辰・日露・太平洋』
10. 高橋誠一郎、2002 年、のべる出版企画、『この国のあした 司馬遼太郎の戦争観』
11. 向井敏 、2000 年、文藝春秋、『司馬遼太郎の歳月』
12. 桂英史、1999 年、新書館、『司馬遼太郎をなぜ読むか』
13. 村井英雄、1997 年、大巧社、『司馬遼太郎　日本を知る』
14. 權悳永、2002 年、学研文化社 、『韓國古代金石文綜合索引』
15. 李道學、1997 年、「定林寺址五層塔 碑銘とその作成背景」『先史と古代』 8、 韓國古代學會